

「先住民族サミット in あいち」とはなんだったのか

■先住民族サミットをふりかえって

はじめに、このサミットをオーガナイズされた方々にお礼を申し上げます。多くの人が大変な時間とエネルギーを費やした結果、このように素晴らしいサミットになったと思います。

いろいろなロケーションで開催されたことは、名古屋を多面的に知ることができ、参加した私達にとっても素晴らしい機会となり、大変良かったと思えました。ロケーションが変わることで、色々な人と出会う機会も多くあり、イベントの後の会食は、一夜ごと思い出深く、楽しいものでした。

マオリの有名なことわざに“Te kai a te Rangatira, he korero”というのがあります。「首長の食べ物は話し合い」という意味で、話し合いが一番大切な行動ということです。

私達先住民族は、このサミットで数多くの大切な話し合いの機会を与えられました。

特にサミットの最終日の翌日、ホテルのロビーで行われた先住民族同士のインフォーマルの話し合いがとても印象的でした。それは昼食時間を忘れるほ

ニューージーランド マオリ スティーブン・ケント

どの白熱した話し合いで、その場に居合わせた人たちの心に深く記憶されたことでしょう。

サミット最終日、フォーラムの前の会議で、始めて各先住民族からの提言書に対する意見交換が行われましたが、このような話し合いがサミット前半にもあり、もうすこし時間が多ければ、さらに深く話し合えたと思います。

また、サミットに足を運んでくれた参加者とも、質疑応答などができる時間があれば、より先住民族の考えを理解していただけたのではないかと思います。なぜならば、先住民族の話し合いはいつでも双方向だからです。

全体として、今回のサミットは2008年のサミットをフォローアップしつつ、また違った角度から新しい一歩を踏み出せた、素晴らしい会議だったと思います。また皆さんとお会いできる機会を楽しみにしています。

いつの日か、Aotearoa NewZealandでも先住民族サミットが開催されることを願っています。ありがとうございました。

■世界の先住民族は一つの大きな家族：先住民族サミット in あいち 2010に参加して

アイヌ・ウタリ連絡会事務局長 島田あけみ

私は、北海道で開催された「先住民族サミット」アイヌモシリ 2008 に続いて、今回の愛知での先住民族サミットに参加させていただきました。世界の先住民族が集まる先住民族サミットは大きな家族の再

会の機会です。今回は特にその思いを強くしました。なぜなら、昨年と今年、AIO (American for Indian Opportunities) の先住民族リーダー育成のための「アンバサダー・プログラム」WIN-AINU として参加させ

てもらいましたが、そのときに会った友人たちに思いがけず再会することができたからです。

2009年アオテアロア（ニュージーランド）での「アンバサダー・プログラム」に参加しました。私にとっては初めての海外経験でしたので、右も左も分からず、アイヌとしての思いを十分に伝えることができませんでした。つらくて涙をながしたこともあります。ニュージーランドの進んだマオリ政策（先住民政策）にはただ目を見張るだけでした。マオリの人たちはそういう私を心からケアしてくれました。毎日、「あけみ、大丈夫か」と声をかけてくれました。そうしたマオリの人たちの優しさに包まれて、私はアイヌとして誇りを持って生きる力をもらいました。

今年は、米国ニューメキシコ州で開かれた「アンバサダー・プログラム」に参加しました。二回目だったこともあり、また素晴らしい通訳の人たちがついてくれたおかげで、自分の思いを存分に伝えることができましたし、「アンバサダー・プログラム」が何を目指しているのかも理解できました。アイヌである私にとっての「メディスン」（精神的な核）は何かということも発見することができました。

「先住民サミット in あいち」では、短い時間ですが、私の思いを発表する場を与えられました。「アンバサダー・プログラム」で学んだせいか、内容はともかく、なんとか失敗しないで発表できました。壇から降りたとき、思いがけないことが待っていま

した。何人かの先住民たちが私のところに駆け寄ってきたのです。なんと、ニュージーランドやニューメキシコで会ったロン、ケント、クリシーたちでした。このサミットで彼らと再会できるなんて思っていませんでした。彼らは、「あけみが堂々と発表をした」と涙を流さんばかりに喜んでくれました。

翌日、私は彼らと何時間も語り合いました。首都圏のアイヌが抱えている問題を乗り越えるために、私が何をすればいいかを真剣に考え、いろいろな助言をくれました。親身になって私と向き合ってくれる彼らの優しさ、熱い思いが伝わってきました。彼らは私にとって先住民という血でつながった家族なんだと心の底から思いました。

米国とアオテアロアの友人以外にも、多くの世界の先住民と出会いました。そして、先住民は多様だけれど、心に流れるものは同じだと確信しました。

こうした出会いの場を与えてくれた、愛知での先住民サミットとその実現に努力された方々に心から感謝します。いろいろな場を与えられ、経験を積む機会をもらっている私は、先住民の国際的なつながりのなかで、アイヌ民族の積極的な役割を果たせるように、私なりの小さな一歩を踏み出したいと思っています。特に、AIOとそのマオリの姉妹団体AMOとのつながりを大切にして、アンバサダー・プログラムの取り組みをじっくりと学びたいと思っています。

■アイヌの心からの叫び

アイヌ・ウタリ連絡会代表 宇梶静江

私は畠山さんの発表を聞いて、同じアイヌとして、アイヌの心からの叫びを聞いたような思いでした。「アイヌのことが嫌でしょうがなかった、アイヌであることをやめようと思っていたが、死んだ兄が仁王立ちで夢の中に出てきて、その怒った形相を見た時に、自分はアイヌとして生きなければならないと思った」という話でした。同じアイヌとして、アイ

ヌであることを止めようとしながら、アイヌの道に戻っていく、その気持ちは痛いほど分かります。

左右におびた数頭のイルカを見ながら、波を分けて進む船の先頭に立つ畠山さんの姿に、狩猟民族としてのアイヌの姿を重ねました。その畠山さんが、アイヌの先住権としての漁業権の復活に全力を傾けておられることに深い感銘を受けています。

アイヌ民族が日本の先住民族として認められた今こそ、私たちアイヌ民族が長い歴史的不正義を精算するために声をあげるべきです。失われた権利を求めて行動を起こすときです。しかし、そうした声は、そうした行動は、長い抑圧の歴史によって傷ついたアイヌの心の中の奥深くに眠ったままです。

そんな中で、畠山さんがあげた声はアイヌの眠りを覚ますだけの力を秘めたものだと私は思います。私は長年アイヌの運動にかかわってきましたが、何も獲得できないまま今日に至っています。日本社会は私たちに何一つとして権利を与えようとしていません。そんな状況を畠山さんの大きなビジョンと情熱が切り拓いてくれると直感しています。

■「先住民族サミット in あいち」から得た教訓

世界先住民族ネットワーク AINU（略称：WIN-AINU）が発足され2年目を向かえた WIN-AINU は、これまでもさまざまな連帯活動へ繋いできた。名前が意味するようにさまざまな海外の先住民族との交流は第1回の「先住民族サミット」アイヌモシリ2008から続いています。まさに、AINU と市民、世界の先住民族の連帯強化は目を見張るものがあります。そこで、2010年10月に実施される「生物多様性条約第10回締約国会議」（COP10）へ何らかの形でかかわって行きたいと、わたしたちは考えていました。そんななかで、愛知県立大学教授・多文化共生所の稲村氏と交流のあった代表・萱野氏から話があり、WIN-AINU が主催・連携団体として加わることになりました。2010年5月から代表：萱野志朗氏、副代表：結城幸司氏、国際部長：小野有五氏の3名が責任者になり準備作業に入りました。マウコピリカ音楽祭に向け、結城幸司代表が務めるアイヌアートプロジェクトが中心になり、ミニ音楽祭を始動し、成功に終えたようでした。また、愛知県が伝える先住民族サミットに対するテーマと理念が次のように掲げられました。

まずアイヌ民族が畠山さんの声をしっかりと受け止めて、ともに闘うために立ち上がる必要があります。と同時に、日本の市民社会も畠山さん支援のために立ち上がっていただきたいと強く、強く希望します。大学、学問の世界で大きな力を持っておられる先生方にお力になっていただければ、私たちの運動の大きな推進力となるはずですが、今はまだ何をするか模索している段階ですが、具体的な動きが生まれたときには、またご相談させてください。ご多忙のこととは存じますが、どうかお力をお貸しください。

末筆ながら、みなさまのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

WIN-AINU 札幌事務局長 島崎直美

- ・フォーラム「先住民族が伝える共生の知」
- ・マウコピリカ音楽祭「自然と人、人と人の繋がり」

「近代化と開発によって、自然環境の破壊とともに先住民族の文化が痛手を受けています。「生物多様性」と「文化多様性」は車の両輪ともいえるものですが、その両方が痛手を受けているのです。先住民族が伝えてきた共生の知恵と価値観を共有することは、人類すべてにとって重要なことです。生態学、環境学、地理学、考古学、文化人類学などの研究者と、世界各地の実践活動家や生活者が集い、環境と文化が紡ぎだす多様な地球の現状について議論し、「生物・文化多様性」持続の道筋を模索し、発信します。」

しかし、WIN-AINU の私たちには、生物多様性とは一体どのようなものなのか？どのように捉えていけばいいのか、よくわからないのが現状でした。そのため、事前に WIN-AINU が生物多様性に焦点をあわせた学習会を開催したのは7月でした。講師は WIN-AINU の事務局長秋辺日出男氏が「WIN-AINU の関り/経緯～行動と発信」「海外先住民族とのマウコピリカ音楽祭：愛知県立大学との連帯計画」というテーマに沿って実施しま

した。学習会以後も数回の会議で議論し、役割分担についての確認作業は大変でした。大学との連携について、AINUの役割について協議しましたが、なかなか内容が見えてこなくて、不安になったのも事実でした。わたしたちの不安がつのるなか、主旨、役割について説明のため、稲村氏が名古屋から札幌に来訪する運びになりました。また、主催である朝日新聞社と研究者たちで構成されている愛知県立大学での運営会議に参加することになりました。会議にはWIN-AINUの代表、副代表、事務局長、札幌事務局、国際部長が愛知へ出向き、開催される現地の視察もしました。先住民族サミット開催まで1ヶ月前に迫った時期でした。

海外の先住民族の招聘もなかなか決まらず、短期間内での連絡は大変であったと想像できます。アイヌ側でのハプニングも間際まで続きましたが、10月15日～18日「先住民族サミット in あいち 2010」は開催の運びに至りました。WIN-AINUからは8名のメンバーがセッション中で各自のテーマを発表させていただきました。残念ながらわたしは、全員の発表を聞くことができなかつたのが残念でしたが、評判はよかつたようです。今回アイヌのメンバーにエンチュウ（樺太アイヌ）の田澤氏、産廃問題で取り組んでいる紋別市の畠山氏などが参加し、いろいろな角度からアイヌ民族の発表ができたことはよかつたと思います。さまざまな思いをもつたアイヌウタラ（アイヌの仲間）が、さまざまな場所で、アイヌの現状を報告できたのがよかつたと思います。アイヌ民族からの発信は、国内にはもちろんですが、世界に発信することができました。アイヌの現状、実態を伝えることができる共有の場はとても重要であるし、一方的な行為の場であつてはならないと強く感じたサミットでもありました。また、世界の先住民族との出会いは、やはり、学ぶことが多く、楽しかつたです。

また、音楽や踊りはやはり壁はなく、言葉もいらない。それぞれのパフォーマンスは、楽しくてすばらしかつたです。

今回は、あくまでも会議が中心で仕方がありませんが、異なる民族同士が交流できる時間がもっとほしか

つたと思います。お互いの持つ問題や発展的に進んでいる問題などの情報交換ももっとすべきだつたと、少し残念に思いました。海外先住民族は、マヤ民族、クリンギット民族、プエブロ民族、ナバホ民族、マオリ民族、アス・ロウ民族、シェルパ民族、アミ民族、インドネシア、そしてアイヌ民族16名が集まりましたが、出会いをもっともつと大切にすべきであつたと思ひました。今回の反省を教訓として、先住民族同士がより活発に深く議論できる会議を、異なる民族同士が連携し尊重して共に生きていくための会議を、これから目指していけたらと思います。それが、本当の多文化共生に繋いでいくということだと思ひます。

しかし、このような場に参加できたことは非常によかつたと感謝を申し上げます。COP10本会議に参加できなかったのは残念でしたが、多くの出会いがあつたことに喜びを感じたサミットでした。また、WIN-AINUでは、11月12日に札幌市において「先住民族サミット in あいち 2010」の報告会をさせていただきました。多数の市民に聞いていただいたことは大変よかつたと思ひます。

10月18日最終日には、愛知県立大学と先住民族による宣言が作られました。序文では下記のように書かれています。

先住民族の重要性は、しかし、「生物多様性条約」第8条j項の規定を超えた、より包括的なものです。私たちは、COP10の会議と人々に、生物文化多様性そのものの宝庫の継承者として、また自然の持続のための伝統的システムや考え方の継承者として、つまり、実践と思考の両面における継承者としての、先住民族の包括的な重要性を認識し、議論し、尊重し、行動すべきであることを提案します。世界の国々のリーダー、企業のリーダーを含め、世界の人々は、これまでの自然に対する管理や利用のシステムや考え方の誤りをはつきりと認識すべきです。「生物多様性」を保全し、地球を危機から救うためには、システムと価値観の転換が不可欠であり、そのためには、先住民族の文化の重要性を再確認し、そこから学ぶことが重要です。ま

た、政策やリーダーシップへの先住民族の参画や関与が不可欠です。

また、WIN-AINU からも日本政府へむけて[先住民族サミット in Aichi 2010] 宣言を出すことができたのはよかったです。この宣言の全文を、10月28日のCBD 市民フォーラムにて発表をさせていただきました。以下は宣言文の結論部分です。

北海道で、この100年間に起きたことは、今、世界中で起きているといえる。先住民族の権利を奪い、

ただ経済的な利益のためにだけ自然を壊し、利用してきたことが、いま世界中で、生物種の絶滅、生物多様性の減少を招いているということを認識し、地球上の生物多様性の維持のためには、日本政府がCOP10に集まった世界の先住民族の要求を支持、支援することを要求する。

「先住民族サミット in あいち2010」で出会った多くの方々、賛同して頂いた方々、参加してくれた方々、愛知県立大学の皆様、朝日新聞社の皆様にソノソノ イヤイライケレ！！

■「先住民サミット in あいち」を終えてみて

WIN-AINU 副代表 結城幸司

もう4ヶ月も過ぎたのかと考える
いつもの暮らしに戻ってみて振り返って考えると
大きなうねりの中から開放されたような 気持ちでいるのかな
前回の先住民族サミットの時は事務局長でもあったので
それに比べれば今回は、脱力感というほどの虚しさは無かったが
逆に物足りなさという感覚があるような気がする
今回のサミットは中部人類学会と朝日新聞名古屋支局の協力が大きく
資金面やメディア等の充実という部分では前回とは雲泥の差があるからであろうか
恵まれなければ文句を言いながらもやるしかない状況に追い込まれ
恵まれれば物足りなさを感じる
わがまままだよな、つくづく現代を生きる都会型の先住民は

グローバル化が進んだ現代の中で国際会議に出席する先住民も多く
それぞれの発表の分野でも目を見張るものがたくさんありました
あわせて人類学などそれぞれの分野で活躍してきた教授たちの発表も大変面白かった
むしろこの融合のスタイルは、もっと社会に食い込んで行くべきで
先住民族の叡智と現代学問の融合は、同時期に行われたCOP10がもっとも辿りつかなければいけない課題のひとつであったのでは、とさえ感じています
4ヶ月も経つとあれほど生物多様性という言葉が飛び回っていた日本社会も
まるでブームが去ったように
また経済中心の情報が飛び回っている
中国に抜かされたとか GNP がどうのこうのとか 政局が悪いとか

経済大国になって社会が差し出したものは、自然破壊そのものであって
自然が無くなってそれぞれの特徴を持った文化も影を潜めてきた
先住民族の社会においてそれがどういう意味合いを持つのか
その大地から様々なものを受け取り宗教観や芸術を作り上げてきた先住民族にとっては
自然破壊が文化破壊に繋がってゆく、COP10や生物多様性が1ブームに終わってもらっては困るのである

今回のサミットの特徴として、会議とあわせて音楽イベントもこのサミットを盛り上げる特徴となったと思っています

自然環境も先住民族にとって不可欠なものであるのと同じで、それぞれの地域から生まれた音楽や語りも
この地球が多種多様の文化で成り立ってそれぞれの地域の恵みの上にあることも
音楽等を通じて、来場して下さった皆様には伝わって行ったのではと感じています
生物多様と文化の多様性、進化する現代と先住民族、環境破壊と環境保全、グローバル化と地域での生き方、
考えるチャンスの大きいサミットとなっていたとおもいます。

人間誰しも先住民がスタートで、進みすぎた現代人にとって、人として何を見つめて生きなくてはいけないのかを思い出させてくれるサミットであったのではないかとと思っています

今後この取り組みを一過性のものとしなくて継続的に続けることで、本当の意味の生物多様性、文化の多様性を語り合える社会ができて行くことを祈念してやみません

たくさんの方が関わりこのサミットが成り立ったことに感謝の気持ちをささげます
ソノノ イヤイライケレ

■ネイティブアートプロジェクトを終えて

愛知県立芸術大学美術学部講師・ART&LIFE 自然学校代表 宮崎 喜一

始まりは一枚のイラスト。2010年10月に完成したばかりの愛地球博記念公園「地球市民交流センター」の中央アトリウムのバトンに下げられた沢山のフラッグの下で、人々が集い、歌い、踊る風景をイメージし描く事から始まった。「ネイティブアートプロジェクト」をスタートするにあたって考えた事は、大人にも子供にも海外の方にも一目で分かる「生物多様性」のキービジュアルだった。先住民族達が長い歴史の中で回りの自然・生き物達をいかに敬い大切に扱ってきたかを伝える為には、彼らが描いてきた

「生き物たちの姿」をより多く圧倒的なスケールで紹介する事で、理解を容易に出来ると考えたのである。フラッグという形状を選んだのは、このイベントが日によって会場を変えるといた特殊性を考え、どの場所にもフィット出来るインスタレーションとしての装置と考えたからである。

準備はまず限られた時間の中で出来るだけ広範囲から「先住民族の画」のサンプルを探し出す事だった。この際にはまず平面に描かれていて参加者が容

易にトレース出来るものに絞った。収集は愛知県立大学の大学内資料に留まらず「リトルワールド」の協力の下、館内展示物や収蔵庫書物に至るまで数多くの中から図版を選び出した。次に集められた資料を「国」「民族」「用途」などをフォーマットにして150種以上のサンプルシートを作成した。同時に描く為のフラッグ(1250cm×1250cm)80枚(350cm×350cm)500枚を手分けして縫製し愛知県立芸術大学の学生やイラストレーターによって絵の制作も開始された。フラッグの作成は当日会場内でも続行しミニフラッグは当日参加者が資料から選び自ら描いてもらい持ち帰ってもらった。最終的に大型フラッグは75枚完成しミニフラッグも250名余りの参加があった。

予測されていた様に「COP10」本会議は結局のところ、自然資源の利益分配の話に終始し、一年に40000種喪失されているという生物の種の絶滅をいかに食い止めるかといった、具体的な提案や目標値も出せないまま次に持ち越すことになった。

今人類に求められる事は「新しい価値観」の創出だと考える。これまで先進諸国が続けてきた「物質による豊かさ」から「精神的な豊かさ」への移行こそが必要とされているのではないだろうか。先住民達の個々の暮らしは、その周りにある限られた資源を、知恵と技術を伝承しながら暮らしに役立ててきた。そして自然に敬意を払い、適度な距離やバランスを保ちながら綿々と暮らしを続けて来たのである。それこそが今、我々が学ぶべき実は最も新しい「価値観」ではないだろうか。

「先住民サミット in あいち 2010」で世界各地よ

り集った先住民族や、アイヌ民族の諸々の発表には正に人類の未来に向けての新しい価値となるヒントが数多く含まれていた様に思う。自然環境を守る為には法律、科学技術、意識改革の三つの方法があるといわれている。私はその中で「意識改革」こそが今の人類にとって最も重要な方法であると考えている。そしてこれらを伝える為には個々の「美意識」を高めなければならない。「美意識」こそ行動の為のエネルギーだと思うからだ。

その手段として「美術」や「音楽」などの芸術活動は最も有効なものだと思うのだ。

今回のイベントにおいて行われた「マウコピリカ音楽祭」「ネイティブアートプロジェクト」は民族や時代を越えて、心の無意識の深い部分で人々が繋がる機会になったと思う。「先住民族の絵を模写しているとどんだのめり込んでいって、手が勝手に動きだす様な気がするのです」と、参加してくれたある学生が話してくれた。きっと我々の身体の中には、永い間の人類と自然との深い関わりを繋ぐ血の様なものが今も流れ続けているのだと思う。生物多様性を守る為には学問や研究、芸術などの領域を越えてあらゆる手段で行動する時なのだと思う。

最後に今回のプロジェクトに快く協力して頂いた、リトルワールドの亀井研究員・宮里研究員の諸氏、愛知県立大学の稲村教授・杉山教授・林千枝子さんを始めスタッフの皆さん、朝日新聞社の日丸氏、日丸真里佳さん、イラストレータの余語エリコさん・飯田友子さん・名川敬子さん、そして愛知県立大学および愛知県立芸術大学の学生諸君、そしてこのプロジェクトに参加して頂いたすべての皆さんに感謝している。

■「先住民サミット in あいち 2010」に参加して

京都産業大学講師 岡崎享恭

先住民サミットは、嵐のように訪れて、嵐のよう

に去っていった。そんな印象です。その中で本当に

いろいろな出会いがありました。忙しい日々におわれ、ゆっくり振り返る間もない中で、いただいた写真を見ながら、一つ一つ思い出しています。

先住民族サミット in あいちが開催されることを耳にしたのは、2010年春の名古屋でのアースデーに顔を出したときでした。会場のステージで結城幸司さんや稲村先生が、サミットでどのような活動をするのかについて話をされていました。海外からの先住民族もやって来て、COP10に向けてアイヌ民族とともに先住民族の声を伝えるこの機会に、翻訳・通訳(英語のみですが)させていただけないかと、初めてお会いした稲村先生に、お願いしました。

また9月に結城さんが話を通してくださり、10月に入り、稲村先生から、通訳と翻訳のお話をいただきました。と同時に、翻訳の締め切りが迫っていることも伝えられ、それから二週間、とめどなく送られてくるまだ見ぬ発表者の皆さんの要旨を英訳と和訳する毎日に明け暮れました。「正確性よりもスピード重視です。」稲村先生のこの言葉に後押しされて、とにかく急いで訳しました。

さて本番ですが、やはりあっという間に終わったというのが印象です。せっかく皆さんとお会いしたのだから、もっともっと話をしてあげばよかった。皆さんがそれぞれの場所に戻る前に、訳者としてもいろいろな人の話の間にも立ちたかった。それでも、クリシーさんのナバホをはじめとするアメリカンインディアンの歴史の発表を聞いた田澤さんが、「エンチュが経験してきた分断と移住の歴史とまったく同じだ。話を聞いてよかった。」とクリシーさんに伝える間に立てたこと、島田あけみさんと宇梶静江さんがロンさんやエディーさんとAIOやAMOでの経験や将来の話がされるところで間に立てたこと、その他訳者冥利に尽きる場面は多々ありました。本当

に参加させてもらえて幸せだなと思います。

ただ訳者としていたらない部分も多く、特に最終日愛知県立大学でのボブ・サムさんの挨拶では大きな失敗をしてしまいました。真剣に誠実に話し出すボブ・サムさんの口から、「まずこの土地の先住民族であるアイヌの方々、ジャーマンの方々にお礼を言いたい。」そう言っているように聞こえました。「ジャーマンってドイツ人？」そう頭に浮かんでしまった私は、「そんなはずはない、聞き返そう。」と思い、「今、ジャーマンって言いました？」「そう、ジャーマンだよ」一点の曇りもないボブ・サムさんの目に、私の訳を待っている皆さんに、本当に申し訳なく思いながらも、ドイツ人のはずがない。そう思った私は、もう一度確認。「ジャーマンってジャーマン(ドイツ人)？」「ああ、ジャーマンだ。」うー。これは困った。もう10秒、いや20秒以上待たせている。こんなシンプルな挨拶なのに。でも何かがおかしい、ドイツ人のはずがない。もう一度だけ聞き返そう。「あのドイツに住んでいる人々のこと？」「いや違う。いにしえからの人々だ。」まだまだじっくりこなかったのですが、ドイツ人と訳すよりはましだと思い、「まずこの土地の先住民族であるアイヌの方々、そしていにしえからに人々にお礼を言いたい」、そう訳しました。それから一時間位してからでしょうか、何かの拍子に、「ああ、あれは、「ジャーマン」じゃなくて、ジョーモン、縄文だったんだ。」「この地に昔から住むアイヌ民族だけでなく、縄文人の血を引く皆さんに、お礼を言いたかったのだ」と気付きましたが、時すでに遅し。訂正する機会もなく、悔しい思いをしています。

今回は本当に貴重な体験をさせていただきました。またこれに懲りず、日本語と英語のみですが、通訳が必要な際にはお声をかけていただければと思います。皆さん、本当にありがとうございました。

■学生と広告マン、二足のわらじで駆け走る

朝日新聞名古屋本社広告委員・愛知県立大学大学院国際文化研究科院生 日丸美彦

COP10 を契機に、朝日新聞社は愛知県立大学と共に、『にほんの里フェスタ』(2009年4月)、『せかい SATO フェスタ』(2010年10月)を大勢の方々の並々ならぬご協力を得て開催しました。その成果をもとに、朝日新聞紙面を通じて「生物多様性の恵み」と「生物多様性と文化多様性の意義」を全国に発信することができました。関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

二つの事業を通して、環境問題というよりは、“人間の生き方”そのものが、今、問われていることを実感します。私を含め現代人は、自分たちの幸せのみを追求した揚げ句、生きものとの“つながり”を分断し、先住民族や里の人たちの“営み”さえ奪ってきた現実に直面します。

里のばっちゃんや先住民族の方々から「人間は、自然の一部、人間は、生きものの一つである」ことを学びました。「自然を保護する、生きものを守る」という言葉にも、人間の驕りが見え隠れしているように感じます。

私自身、新聞社の広告部門に身を置きながら、表面的な理解だけで環境広告を企業に提案し、読者に安易な方法で伝えてきたのではないかと、自問自答せざるを得ません。稲村先生との出会いから、学生と広告マンの二足のわらじを履きました。履き慣れない二足のわらじで駆け走り、視界の広がりを感じながらも、学生として学んだことを、メディアの人間としていかに伝えるか、試行錯誤の日々が続きます。

私たちは環境問題の解決として、CO2削減など数値目標を立て、環境技術の開発だけに目が向きがちです。しかし、そうした数値や技術だけで“生きものとのつながり”を持続可能にすることはできません。里のばっちゃんやじっちゃん、先住民族の方々が登場してきた伝統的な文化そのものに、環境問題解決の大きな糸口があるように思えてなりません。現代人が時代遅れたもの、未開なものとして軽視してきた多様な文化にこそ、自然と対話する持続可能な仕組みが組み込まれています。

自己の利益に執着し自己完結できると錯覚した現代人は、生きものとのつながりだけでなく、人と人のつながりさえ失う“無縁社会”まで作り上げました。経済効率優先によって「文化の多様性」を喪失し、生物多様性だけでなく、地域社会、家族の絆まで崩壊させたと言えるでしょう。

愛・地球博、COP10で生まれた新たな“つながり”をもとに、現代人の“知恵”が試されています。これから10年の人類の選択が、人類生き残りの最後のチャンスと言われています。人間が本来持っていた自然と対話する力を蘇らせ、「多文化共生社会」に少しでも近づければと願ってやみません。

最後に、二足のわらじで駆け走る私と、初めて操作するパソコンに涙する妻に対して、多くの方々から温かいご支援をいただいたことに、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

■「先住民族サミット in あいち 2010」で知った先住民族のダイナミズム

愛知県立大学外国語学部講師 渡会環

私はブラジル地域研究を専門としているが、都市で研究、調査をしているため、ブラジルでも先住民

の方たちにお会いしたことはほとんどない。そのため、今回のサミットをお手伝いさせていただくことになって、少し当惑した。先住民の参加者とのように接したらよいのか分からなかったのだ。

お会いしたことがほとんどないという以外に、私が当惑した一番の原因は先住民族名、たとえば、「マオリ」や「アイヌ」といったものにあった。それらによって私自身が「他者」として位置づけられたようで、私と彼らの間に距離を感じてしまっていたためである。よくいわれるのは、「マオリ」や「アイヌ」といった人々が、それぞれの社会でマイノリティであるがゆえに「他者」として位置付けられるということだ。マジョリティとされる私の「他者」化を、私は感じていたのである。しかしながら、私の当惑もサミットが始まるや否や消え去った。

なぜ消え去ったのか。一つに、マウコピリカ音楽祭で聞いたアイヌの演奏が大きい。彼らはロックを組み入れることでアイヌの伝統音楽を意図的にハイブリッド化させていた。それは、今の彼らの自己表現でもあったが、彼らの中の世代を超えて、さらには「アイヌ」という枠を超えて、演奏者と聴衆者が

同じ音楽を楽しむための行為だった。

こうした文化のハイブリッド化は、グローバル化時代に特に顕著な、文化の流動的な状態として捉えられていることが多い。だが、私がアイヌの行為に見出すのは、多様な背景を持つ人々との間に関係を築き上げようとするダイナミックさである。

もう一つのきっかけは、イベント後の宴会である。そこには「マオリ」も「アイヌ」もなく、ただただ食と会話を皆が楽しんだ。また、そのときに、マオリの方と結婚された日本人女性から印象的な話もきいた。彼女はマオリの文化を学び継承に関わっているということだったので、「マオリ以外の人々がマオリに入ること、そして彼らの文化を学ぶことを彼らはどう思っているのですか」、そんな直球の質問を私は投げかけてみた。すると、彼女は答えた。「マオリは外の人間も受け容れる文化を持っているんです」。

多様な音楽ジャンルがまじりあい、そして人が交流しあう、空間と経験を通じて、私は枠の他者化の効果から解放された。これが結果として、生物多様性の問題を彼らの問題としてだけでなく、私たちの問題として実感させてくれることにもなった。

■先住民サミット in あいち 2010に参加して

愛知県立大学非常勤講師 カナル・キソル・チャンドラ Khanal Kishor Chandra

世界 SATO フェスタ「先住民サミット in あいち 2010」に参加することができ、私はとても光栄に思いました。自分も先住民の研究をしている関係で、生物多様性は先住民の一環として考えなければならないと思っています。しかし、これまで国家が彼らを自然との関係から排除しようとしてきました。その結果、世界の自然とそこに存在する生物の歯車が壊れ始めています。先住民が「自然や大地は自分の母である」と考えてきたことから、彼らと自然の結ばれた関係が分かると思います。しかし、彼らは、文明社会では工業の発達に伴い「遅れた人間」とされ、資源分配からは排除され、大きな差別を受けてきました。彼らの祖先が築いてきた歴史と文化を阻害してきたことで、今の地球の危機があると思います。

先住民サミットで、先住民が「遅れている」のではなく「優れている」ことが明らかにされました。彼らが今日まで伝えてきた自然の持続的利用の智慧や自然観によって、人間と生態系の組み合わせの歯車が動いてきたことが明確に示されました。今回の先住民サミットに参加して、世界各地の先住民と自然の共生的な関係が再確認でき、とても勉強になりました。